

{書 評}

順 著
泉・康子・瀬 一番
夫 健 戸 実 子 信 川 小

育 保 の 日 本

岡 田 正 章

この書物は「この本について」とのまえがきでことわっているように、「日本の保育所の歴史と現状」を内容としている。歴史の部門では、第一期を明治から大正中期までの「保育のはじめ」として、その間の保

育施設の特徴を「文明開化、富国強兵の足おとたく、産業革命へと突入していった日本の資本主義社会の荒地のなかで、日本の保育施設は、花をひらいた」と要約している。第二期は大正中期から昭和戦前期までの、「公立託児所もできて」として、その時期の特徴は、「第一次世界大戦後、独占資本主義のもとで、国民の生活不安はよりふかまってきた。貧困のもとで働く母親とその愛児たち。そして、あいつぐ恐慌の嵐。そのなかで、もりあかった労働運動や農民運動を背景に、託児所は職場に、都市のラムに、農村に、しだいに、社会事業施設としてつくられ、あたえられてきた」ことにおかれている。第三期は昭和戦中期の「戦時保育のなかで」とされ、その時期の特徴は「第二次世界大戦への足どりのなかで、ファシズム体制は強化され、国家独占資本主義へのテンポが早まっていったこの時期……、保育施設は、国の体制のなかで、また戦時目的のなかで、どのような経

路と論理によって、くみいれられていったのであろうか」という問題提起の形でまとめられている。第四期は昭和戦後期の「児童福祉施設として」の時期となっているが、その特徴は、「第二次大戦後、占領政策のもとに移入された民主化政策によって、日本の保育所は、どのようにかわったであろう。また、講和締結後、国家独占資本主義の本格的な復活とともに、保育政策は、どのようになってきたらうか」と、第三期同様問題提起の形で要約されている。こうした時代区分とその時代の保育施設の特徴づけには、かなり明確な一定の史観が根底になっているのが特徴的であり、従来の保育所の歴史研究に対して一つの問題提起をしたものとして注目される。それは「資本主義社会のもとでは、本質的に、いわゆる生産力の発展のための保育と同時に生産関係あるいは体制維持のための保育が、上の方から、しだいに強くまた恩恵的に、うち出されてくる傾向にある」(二七六

頁)というむずび的なことばにおいて、読者に考えさせているもののようにある。確かに、そうした観点からの保育史研究の成果をふまえることは必要であろう。ただしこの体制をうち破ることが保育運動を国民すべてのものとして発展させるために必要だとするならば、そのための路線こそ、単に幼い子どもを幸福にしようとする人間的な願いを確認する以上に、客観的に描写されることが重要であったように思われる。

歴史の部門における、右のような大綱同様に、本書においては、いたるところに重要な事項が問題提起の形ですまされている。明治初期の幼稚園が恩物を型通りに教えこむことに終始したことをとらえて、「もつとも基本的な課題がこの保育からは脱落していた」(一六頁)ことを指摘しているが、ここにいう基本的課題が何を意味するものか必ずしも明確でなく、読者をして各様に考えさせるにとどまっている。

大正十五年の幼稚園令が幼稚園を下層民に普及させようと企図しながらも、ついに、何らの進展をもたらさなかったことも、「このような幼稚園の新しい目標にもかかわらず、幼稚園は、労働者階級のなかに根づいていくことはむずかしかったのである」(一〇〇頁)と指摘しているのみで、その理由を必ずしも明確にしていない。

また、史料の考証においても若干の不備をまぬがれていない。例えば、明治九年幼稚園が開設されるに当って、当時の上流階層に一般におこなわれている乳母や子守りによる保育をきびしく批判し、幼稚園保育の意義をといたものとして、桑田親五著の「幼稚園」のまえがきを引用しているが、このまえがきは、筆者たちがおそらく出典としたであろう倉橋惣三らの「日本幼稚園史」の叙述にもとづくものと思われるが、厳密に検討するならば、決して日本の保育事情に対する批判ではなくて、原典であるイギリス書の序文の訳にすぎない。もちろん、

ん、こうした引用はまぬがれない場合を少しとしなが、すぐれた労作のなかの、かつまた引用の性格が重要なところだけに惜しまれる。

しかし、従来の保育所の歴史研究と異なり、異なる専門の四領域(社会事業史、児童心理学、児童施設、幼児教育学)の研究者が共同してきわめて内容豊かに、とくに児童施設研究の立場から、きわめて限られた資料を用いて保育施設の時代的特色を画がいていることなどは、注目に値する。また、保育所の現状論に約四〇%のスペースがさかれていることは、現代保育所論を理解するためにも大いなる参考文献となるであろう。保育所関係者のみでなく幼稚園関係者にも一読を奨めたい。

(宝仙学園短期大学)

生活科学調査会 編集

医歯薬出版株式会社 発行

B5版三〇二頁 定価五〇〇円下二〇〇円